

浄土

monthly
JÔDO

10

October 2009



法然上人讃仰会



たとい余事をいとなむとも、

念仏を申し申し、

これをする思いをなせ。

余事をしし、念仏すとは思うべからず。

(つねに仰せられける御詞)



呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

10月号『童』

浄土

2009/10月号 目次

法然上人のお念仏 (第1回).....	阿満利麿	2
浄土誌上ライブラリ「阿弥陀さま」(四)	佐藤春夫	10
連載小説 快僧渡辺海旭	前田和男	16
江戸を歩く 第三十回	森 清鑑	22
会いたい人 柄本明さん①	関 容子	30
響流十方	小村正孝	38
朝めし礼賛⑦	麻生タオ	42
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



法然上人鑽仰会
主催
講演会
法然上人の
お念仏
第1回

法然 上人の お念仏

阿満利磨

第一回

浄土宗の方には、よくご存じの法然上人のお弟子である「耳四郎」という人の話から始めたいと思います。

耳四郎というのは大変な盗賊だったそうです。耳四郎の「耳」というのは、いろいろな情報を集める。つまり、あそこの家にはどのくらい財産があるかとか、いつ押し入ったらうまくいくかとか、そういう情報を集めるのが上手だから「耳四郎」という名前がついていたというんです。

あるとき彼が京都のさる屋敷に昼間から忍び込んで、大体泥棒というのは、昼間から忍び込んでいるものです。そして、夜中になって家人が寝静まると仕事をすること、で、耳四郎は昼間から縁の下かどこかに忍び込んでいたんですよ。

そうしたら、そこへ何と法然上人が来られて、その屋敷の主に専修念仏せんじゆの教えをこんこんとお説きになるわけです。その話が懇切でいつまでたっても終わらなかった。もうそろそろ終わってくれと自分も仕事ができるのと思っていると、とうとう夜中になってしまっても、まだ話が續いている。しかも、聞いてみると、何だか身にしみてくるような話を法然上人はしておられる。

人間は何と罪業、罪の深い存在であるか。その罪をそのまま背負って、やがて後生は地獄へ行くんだと。地獄へ行くその恐ろしさ、地獄の暮らしがいかに悲惨であるか、そういうこともお話になったんでしょう。そして、そういう悪人が救われる道は、阿弥陀仏の教えに従ってお念仏をすることだと、そういうことを説いておられた。

それで、すっかりその耳四郎は、何だか自分のことを言われているような気になったんでしょう。そして、自分が今まで犯してきたさまざまな悪を思い返して、これはもう地獄行きは必定ひつじやうだと、それでは、どうしたらその地獄行きから免れることができるかというこ

とを考え、本当に望んだわけです。

それで、とうとう夜明けを待つて縁の下から出てきて、法然上人に面会するに至ったわけです。そして、法然上人に、自分のような悪人でも、どうしたら救われることができるかということをや々と訴えたんです。

そうすると、法然上人から、「どんな人間でもあっても、どんな悪業を犯していても、その『悪』が問題ではなくて、ただ、ただ念仏をするかどうかということなんだ」ということを聞かされて、たちまちのうちに改心をして、法然上人のお弟子になることになったわけです。

そして、教えるという「教」、それから、「阿弥陀仏」と書いて、「教阿弥陀仏」という法名までもらって、それから、法然上人のところに日参をする暮らしになったというんです。

ある日、いつものように法然上人のもとへ通っていると、いわゆるとのい殿居役ですが、宿直役がないということがわかったわけです。いつもは法然上人の夜のお世話をするためにだれかが宿直をしていたんでしょう。それで、教阿弥陀仏は、今晩は自分が殿居役を買って出るということで、法然上人のお世話することになったわけです。

夜中に耳四郎がふっと目を覚ますと、法然上人が起きてこられてお念仏を始めたのです。耳四郎は、こりゃ、おかしいこともあるもんだなと思って「えへへん」と咳払いをしたというんです。そうすると、法然上人はさっとお念仏をおやめになって、また、寝につかれたようであります。教阿弥陀仏は「不思議なこともあるもんだな」と思ったけれども、その日はそれで終わったのです。

そして、耳四郎が元強盗であったためか、京都で十分に暮らしていける手だてがなくて、

関東の親戚を頼って、いよいよ関東のほうへ下ることになったわけです。それで、法然上人にお別れを申しに来たんです。

そのときに、この耳四郎は、「自分は学問のない愚かな人間であるから、仏教の話はよくわからないけれども、自分のような学問のない者であっても、このお念仏についての奥深い教えがまだ何かあるのではないか。その奥深い教えを一言法然上人から賜って、それを生涯の形見としたい」と法然上人に申し上げたのです。

そうすると、法然上人は、「念仏する上で、念仏には何か奥深い、人に簡単に話せないようなものは何もない。ただ、念仏をすれば必ず往生する。それで十分なのです。にもかかわらず、念仏のほかに何かまだ奥深いものがあるとあなたが思っているのは、ひよっとしたら、『念仏の仕方』というものがあなたにはわかっていないからかもしれませんね」と言われました。

そして、法然上人は、突然「あなたがいつぞや宿直をしてくれていたときに、私は夜中に起きて念仏をしました。そのときに、あなたが咳払いをしたので、私が念仏するのをやめたことを覚えていらっしやいますか。実は、あのときの私の念仏こそ、往生は確実である。つまり、あなたが求めている念仏の仕方なんです」ということを言われたわけです。それから、法然上人は、こういうことをおっしゃったんですね。「人は必ず人前を気にするものである。どんなに親しい夫婦の間柄であろうと、家族の関係であろうと、『人前を気にする』。人前を気にする『飾る心』というのが人間には必ずあるものだ。そういう『飾る心』で念仏をしていても、往生を確信するということにはなかなかならない」と言われました。

つまり、「人前を気にする」、そういう飾る心を捨てて真心を込めて念仏をしたときに初

めて、念仏によって往生が決まるということが確信できるようになるんだと。だから、大げさに言えば、念仏を妨げているのは人間なのだ、ということですよ。

つまり、人間がいるということは、その人の人前を気にするから、絶えず飾る心が起こるわけです。だから、念仏をする上での邪魔というのは「人間だ」と言ってもいいんだというぐらいのことを法然上人はおっしゃったのです。

「だから、自分も人前を飾ることなく、心を込めて念仏ができるにはどうしたらいいかを考えて、夜中に起きてだれもないということを確認めて、心行くまで念仏をするんだ。それをこの間、あなたに妨げられた。だから、人間は『飾る心』が生じるということを承知の上で、その『飾る心』を気にせずに念仏をするということが一番大事なんだ。それはちょうど『強盗が自分は盗賊であるということを感じているようなものだ』と言うんです。

この人前に飾る心を起こさずに、密かに心から決心して念仏をするという、そういう心構えは強盗に例えると、『強盗が自分の正体を気取られないように決意をしているということと同じようなものなんだ』ということまでおっしゃって、『人前を気にせずに念仏できるといふようになったら、昼間であっても、少々人がおられてもできるようにする。そういうふうに入前を飾る心を離れて、心を込めて念仏するようになるということが一番大事である。人に知られなくても阿弥陀仏は知っておられるのだから、その念仏は必ず往生をもたらしてくれるであろう』と教阿弥陀仏におっしゃられたわけです。

ところが、教阿弥陀仏は「よくわかりました。しかし、それでは、人前で声を出して数珠を繰りながら念仏する人もいらっしやるではないですか。あれはいけないですか」と言ったわけです。

そこで、法然上人は「人間の中には、生まれつきまことの心を持った人もいるものだ。

そういうまことの心を持った人は、念仏門に入ると、どんな場所、どんな人の前であつても少しも飾る心もなく、真心を込めてお念仏ができるものであるから、そういう人は人前を飾るということは心配しなくていい。だから、人前で数珠を繰って念仏をするのがいいのか、悪いのか、そういうことが問題ではないのである。要は、往生を確信できるような念仏の仕方が問題なのだ」ということを話されたのです。

後に法然上人は、この教阿弥陀仏になぜそういう話をされたのかということをおっしゃっています。というのは、法然上人の教えは、人間は真心を込めて念仏すると言つてもなかなかそれができない。つまり、人間には「真心」というものがなかなか起こらないものだということを、法然上人は強調しておられます。

ですから、この教阿弥陀仏に「真心を込めて念仏せよ」と言われたことは、ある意味では非常に珍しい例だと思えます。

しかし、法然上人はそういうこともあつて、耳四郎に「真心を込めて、人に知られずに念仏せよ」ということを言つたのは、彼が元強盗であつたことを知つての上のことだということをおっしゃっているんです。

強盗をするほどの人間であるから、意志が強いというのは普通の人間以上である。そういう意志の強い人間には、その人間にふさわしいように真心を込めて念仏するのであれば、自分の念仏に自信を持つことができるだろう。「しかし、すべての人間が真心を込めてということは難しいことなんだ」と言つて、また、次のような話を、これは『四十八巻伝』という法然上人の伝記の中に耳四郎の話に次いで紹介されているものであります。

それは、法然上人が流罪になられて、四国へ行かれるときにお供をした随蓮というお坊さんの話です。

その随蓮さんという方は、法然上人のお話をずっと聞いておられて、「念仏をすれば往生する」ということをそのまま言葉どおりに聞いておられて、ただひたすら念仏をする暮らしをしておられたんです。

ところが、法然上人が亡くなられてからある学者がやってきて、「あなたは、念仏をするときに三心（三つの心）をそなえているか」と、つまり、「真心」がそなわっているか、ということです。「あなたは真心を備えて念仏しているか」と聞いたわけです。

随蓮はちょっと驚いて、「私が法然上人から聞いたことは、ただひたすら阿弥陀仏の言葉を信じて、念仏すれば必ず往生できるということであって、法然上人から三心については聞いたことがない。法然上人は、私に三心について教えてくださったことはありません」と答えたんです。

ところが、その学者は相変わらず三心を備えない、「真心を持つて念仏するということ」がなければ、そういう念仏では往生できない」ということを迫り続けたわけです。

それで随蓮さんは随分と動揺したわけです。ところが、そういうことに苦しんでいた中、随蓮は夢を見ます。その夢の中で随蓮は法然上人に出会います。そこで随蓮は自分の疑問をぶつけたのです。

「三心を備えずに念仏しても往生はできないというのは本当でありましょうか」と。そこで法然上人は、夢の中で極楽に咲く蓮の花を指さされて、「この極楽の池に咲く蓮を桜であるとか、梅であると聞かれると、あなたはそれを信じますか」と。随蓮は「蓮は蓮であることに間違いないのであるから、蓮が桜であるとか、梅であると言われるも私は信じません」と。

そこで、法然上人は「念仏もまた同じである。私があなたに教えてきたことは、念仏す

れば必ず往生できるということであって、それは目の前の蓮を「蓮である」と言っていることと同じである。だから、あなたはそれを信じて、ただひたすらに念仏しさえすればよいのであって、詮議は無用のことである」と言われたのです。

夢から覚めた随蓮は、その学者から言われて動揺していた気持ちがすっかりなくなつて、今までどおりひたすら念仏をするようになったという話がつけ加えられているわけです。

私がなぜこういう話をし出したかというと、実は法然上人の念仏の教えというのは、人によって随分と説かれ方が違うんです。

耳四郎のような強固な意志を持った人間には、「真心を込めて、人目を避けて念仏せよ」ということを教えられたし、この随蓮のように、ある意味では生まれつき人の言うことを素直に信じることができる人には、「ただひたすら念仏せよ」としか言われなかったわけです。

これだけではなくて、これは「徒然草」に出てくる法然上人の言葉の中に、「疑いながらも念仏すれば、往生する」という言葉があります。何と疑いながらも念仏すれば、往生すると。これは真心を込めて念仏しなければだめだということと随分と違いますね。疑っていてもいいんだと。これは実はとてもありがたい法然上人の教えです。

私が言いたいのは、こういうふうにならぬ法然上人の念仏についての教えというか、お説教が人によって異なるのはどうしてなのかということです。

(つづく)

阿満利庵(あま・としまろ)

明治学院大学名誉教授(2006年4月から)

仏教雑誌『連続無窮』主宰

『法然の衝撃』『法然を読む』著者

近著『歎異抄一注解・現代語訳・解説』(ちくま学芸文庫)(2009年5月刊行)

浄土誌上ライブラリ 昭和15年〜16年連載

佐藤春夫

|| 子供にわかるお話 ||

阿弥陀さま (四)

観音・勢至がお助けして困ることのないお国



立派な国の三つの条件

そもそも国が立派な申し分のない国であるためには凡そ三つの条件がそろい具わっていないことには完全とは云われないのです。その三つの条件とは何か。国土と統治者と人民たちです。国王が豊かでその上に手ぬかりなく経営されていなければなりません。安楽国——すなわち極楽浄土では金銀など豊富なところに、最大最高で不滅不壊の智慧を持った阿弥陀さまがその智と徳とを傾け尽して国土経営に苦心をさせていただいたどんな風なものが出来ているかという事はごくあらましながら前々号でお話しておいたとおりであります。

わが国でも近來国土経営ということを重要な国策の一つとして考えはじめた模様ですが、人類の世界の文化を代表しようという大きな抱負を持つ限り、これは当然な企てで、ややおそかったという憾みはあっても、何にせよ非常に結構なことで、どんな風な設計が立てられるか、その発表が楽しみに待たれるものであります。それはさておいて、阿弥陀さまの国では早くから国是に従ってその国土が十分に経営されていたのであります。

観音と勢至は大臣の役目

それでその極楽浄土の統治者とはいえますと、これは南無阿弥陀仏御自身とその御相談相手と申すか、その実際上の仕事をなさる大臣のようなお方がおふたり。おふたりとも阿弥陀さまの大へんたくさんのお子さまがたのうちでも父上のお氣に召した方であられる。

観世音菩薩と勢至菩薩とであります。

観世音菩薩はまた観自在菩薩ともいいわが国では一般に観音さまと呼ばれている仏さまです。この仏さまは大慈悲の誓いを立てられた仏さまで、極楽では阿弥陀さまの左のお脇に侍って居られるのです。何ごとでもすべてをよく御存じのお方で人間のすべての事をすっかりお見とおしの上で人間に愛憎をつかさないで、人間を気の毒な可哀そうなと思し召して居られるお方です。もうおひとりの勢至菩薩というお方は、極楽では阿弥陀さまの右のお脇に侍って居られますが、このお方はこの上なし智慧のすぐれたお方でそれ故お頭の上には智慧のしるしに宝の瓶をいただいたお姿で像がつくられて居ります。

勢至は威力

一たい阿弥陀さまはこの上なしのお慈悲と智慧とこの二つをおそなえになったお方ですが、おふたりのお子さんのうちの観音さまが父上のお慈悲の方を受けつがれたのなら勢至さまの方へはお智慧の方を伝えなされたものと見えます。勢至さまは人間に就いて何もかもお見透しになって御存じないということのない点では観音さまと変りはありませんが、このお方は観音さまのように慈悲一方のお方ではなく大へん強いお力をも持って居られるのでこの上なしという智慧で考えになっても御理解の出来ないような嘘やごまかしなどはすぐ見破った上で一旦お腹立ちになると大したお力を持って居られるのです。そうしていつもお行儀のいいその足を一度お投げ出しにでもなると、そのことだけで、三千世界——というのは小さな世界が三千集って一つの大きな世界になっているというのが仏教の方

の世界の考え方で、言わば全世界ということと同じわけです。——その全世界とそれに魔の宮殿とが一時に震動するという程の威力を備えて居られるので勢至菩薩と言われるのです。どこまでも堪忍し我慢をして理解出来るかぎりはどんな悪をも理解するが、どうしても許せない懲らさなければならぬものに対してだけは最後の手段としてこの力を揮うことも出来るというお方です。極楽浄土の成立や発展を邪魔立てする者が万一あった場合にはこの方が出てお働きにならないわけでありましょう。申してみればまあ極楽浄土安楽国の軍部とでもいうのでしょうか。それにしても、ほんの足を投げ出しただけで全世界が震動するというのですから、この方が一度思う存分にあばれたら一たいどうなるといのでしょうか。まあ想像してごらんなさいまし魔の宮殿などは木葉みじん、三千世界などは卵の殻でしょうではありませんか。

けれどもまあめつたにそんな事はありませんまい。と申しますのは、その御相談相手には何事でも大きな慈悲でおゆるしになろうという観音さまがおいになるのですから。よく恩威並び行われるということを申しますが、極楽に観音さまと勢至さまとが居られる限りは、どんな場合に遭遇しても決して困るようなことはございません。それ故、阿弥陀さまはいつも安心して観音さまと勢至さまとに一切をおまかせになつて置かれます。

勢至さまはいつも考え込んで人間の行いや考えをじっと見て理解しようとして居られます。この方は知性に訴えて人間をお宥しになるのです。観音さまは温かいお情けをもつて人間を宥し、人間の苦しみを心配して居られます。そうして苦しさに堪え兼ねて、阿弥陀さまのお情けにお縋りしようと呼びかける人間の声を先づ第一にお聞きつけになるのはこの観音さまであります。

(次号につづく)

旧仮名遣いを全て現代仮名遣いに直しました。
また、幾つかの言葉を現代用語に改めました。
(編集部)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八回

今井正との縁^{えんじ}
ふたたび その1



巨きいが遠くてぼんやりした存在、 海旭

昭和二十六年二月二十五日、日曜日の午前九時すぎ。NHKの人気ラジオ番組「光を掲げた人々」がはじまった。今回取り上げられたのは「新しい時代の聖者・渡辺海旭」。深酒がすぎて今さっき起きたばかりの寝ボケ頭で、この番組のイントロ（導入告知）をたまに聞くととはなしに耳にした男がいた。

映画監督の今井正である。前々年の「青い山脈」では戦前の因習に立ち向かう学生（杉葉子、池辺良）と教師（原節子）らをもちいて「戦後民主主義と青春」を描いて評判を博し、ついで前年の「また逢う日まで」では戦時下の男女の悲恋を題材に出征する学生（岡田英次）と恋人（久我美子）のガラス越しのキスシーンで話題を呼んだ、目下売出し中の左翼文化人の寵児だった。

——渡辺海旭。何年ぶりに聞く名前だろう。

と今井はつぶやいた。海旭が校長をつとめる芝中学（旧制）を今井が卒業して旧制水戸高校に入ったのが昭和四年だったから、それ以来か。いやいや、たしか水戸高校から東大の美学に進んだ昭和八年に海旭が急逝、新聞報道でそれを知ったから、あの時以来か。しかし、今井には、懐かしい人の名を久かたぶりに聞いたという感慨はわかなかった。今井にとって、渡辺海旭は、懐かしいというより、像が焦点をむすばない、巨きいけれどどこか遠くてぼんやりした存在だったからだ。

校長の海旭より存在感を示した 名物生徒監

芝中についてまず思い出されるのは——おそらく今井と同時代の芝中同窓生ならみなそうだろうが——「ワシ」こと名物生徒監主任の石腸千代松だった。芝は規律の厳しさで知られていたが、登校時間の厳しさときたらなかった。登校時間になるとラッパが鳴り、そ

れが鳴り終るまでに正門を潜りぬけなければならぬ。門前には詰襟を一部の隙もなく着込み、巨大な八の字のカイゼルヒゲをたくわえたワシが腕組みをしてデンと構えて目を怒らせている。ときにその脇に校長の海旭も立つのだが、物静かに控えているだけで、その存在感からして、生徒たちにはどうみても主役はワシで海旭は脇役だった。

今井は、毎朝自宅の広尾の寺から市電の天現寺の電停まで歩き、築地行きに乗って、神谷町で下車、そこから徒歩で正門をめざす。道々、麻布十番で下りた東洋英和の女学生たちの小雀たちのようなおしゃべりを好ましく思い出していると、けたたましいラッパの音で現実に引き戻される。非情にもラッパが鳴り終わったら、正門で待ち構えるワシに生徒手帳を取り上げられる。これが三回つづくと、「操行」(修身・道徳)の評価が「丙」となり、他の科目の点数によってはへたをしたら落第。おまけに父兄が呼び出されて「指導」を

受けるのだ。

当時の中学生で時計を携行している者などいないから、正確な時間がわからない。そこで、そうなたたら大変だと、正門への最後の坂道を登るあたりで、登校中の生徒たちは、いつせいに駆け上がる。つられて今井も息を切らして駆け上がる。

当時大正デモクラシーの花盛りで、銀座ではモボ・モガが闊歩。なにやら胸がわくわくする自由でモダンな世の中が来ているというのに、なんとまあアナクロなのというのが今井のいつわらざる気持だった。

幼少時から骨と皮ばかりで病弱だった今井には、この登校の儀式が苦痛でたまらなかった。それだけ今井にとってワシは、いっそう印象ぶかい芝中時代の思い出だった。

芝中時代でワシについて思い出されるのは、これも今井と同時代の大方の同窓生の認めるところだろうが、山岡鉄舟の警咳に接したという文武両道の英語教師で、気象がしば

しば荒れることから「低気圧」のあだなを付けられた加藤貞斎と、英会話教師で紅一点のエドガーズ夫人だろうか。そんなわけで、校長の海旭は、大方の芝中生にとっては、残念ながら、世間では著名人らしいが、印象の薄い人だった。海旭が住職をつとめる西光寺には寄宿生がおり、直接薫陶をうける彼らには海旭は特別な存在のようだったが、ふつうの通学生たちには遠くて偉いだけの存在だった。

今井もそんな通学生の一人だったので、ラジオから渡辺海旭の名が流れたとき、それほど心を惹かれたわけではなかった。

レッドパーズを「廃品回収」でしのぐ

——でも、これも何かの縁だから、聞いてみるか。

今井は二日酔いの頭をふりながら、手元のコップの水をがぶりと飲み、両切りのたばこ

にマッチで火をつけた。起きぬけからたてづけの三本目だ。なかなか目と頭がさめない。——まあ、傘貼り素浪人の身だから、暇ならたっぷりとあるし……。

冒頭で今井のことを「目下売り出し中」と記したが、実は、失職中だった。大手映画会社による「五社体制」にしばらく自由映画をつくりたいとの思いから、今井は前年の昭和二十五年、「また逢う日まで」を製作したあと、戦争をはさんで十五年間所属した東宝を退社。しかし、いまだ占領下日本の支配者である米軍の介入を招いた東宝争議の中心人物でもあったことから、東宝をふくむ映画製作五社は今井を「使用禁止処分」としたのである。

一方この年、朝鮮戦争が勃発、進駐軍はそれまでの「左翼勢力容認政策」を百八十度転換。日本共産党の非合法化と排除に踏み切る。これをうけて日本政府と企業は、職場から共産党員とその支持者・活動家を一方的に追放

した。世にいうレッドバージ（アカ狩り）である。映画界でも今井が東宝をやめた年に百人をこえる解雇者がでた。その多くは今井の「同志」たちだった。今井はその前に「自主退社」したが、退社後に映画業界に「破門状」がまわされ、監督としての仕事ができなくなったのだから、今井もレッドバージの被害者であった。

映画がつくれなくなった今井は、子ども五人に夫婦の七人家族を養うために、隣の未亡人のすすめで廃品回収業をはじめた。この「くず鉄集め」はそこそこもうかった。しかし皮肉なことに今井のくず鉄は折から勃発した朝鮮戦争に使われるものだった。それを知った今井は、いずれ自主制作映画の資金集めのめどがついたらやめようと日々思いながらもままならず、悩みは深く、気分は重かった。せっかく暗い戦争が終わり平和と希望の時代がやってきたのに、なにやらいやな時代に舞い戻りつつある、今井はそんな不安に襲わ

れ、ついつい酒におほれるがちだった。酒席などで今井正をもじってイマイツショウとからかわれるほどの、自他共に認める酒好きだが、最近は「一升酒」ではすまなくなっていた。そんな悩みの深い今井だったので、あまり期待もせずに暇つぶしのつもりでラジオドラマを聞きはじめたのだった。

今井の父と海旭は似たもの同士

最初は聞き流していた今井だったが、やがてドラマが進展していくにつれ、海旭と自らの父親が重なってきて、真剣に耳をかたむけはじめた。

海旭は明治五年生まれ。かたや今井の父は明治十一年生まれで六歳違い。江戸時代をどこかに引き摺っている同世代であり、また同じく僧侶という点で、ついつい比べてみたくなる二人だった。今井がまず興味をひかれたのは、番組中ほどでドラマ仕立てで紹介された海旭の「女性観」であった。映画芸術に

身をおく者としても大いに関心があった。

十余年にわたるドイツ留学から帰国したばかりの海旭に、共に既成仏教の改革をめざす「新仏教同志会」の仲間である高島米峰が、こう問い詰める。

「今日やってきたのはほかでもない。君ももう三十九歳だ。一体君には結婚する気があるのか、ないのか」。それに対して海旭は「昔も今も出家には出家たるべき風儀があるべきだと思う。とにかく僕は出家である限り、一生結婚はしない」と決然と応え、高島を「君は洋行して却ってこちこちの戒律主義者になったようだね」と驚かせる。

今井にとって、ここまでは芝中時代に海旭は生涯独身を貫いている偉い人だと聞かされていたとおりであり、違和感はなかった。ただこのやりとりの時の海旭が自分とほぼ同年であることに、芝中時代同様に、距離のある

遠い存在である思いを強くした。しかし、それにつづくエピソードに、今井はそれまでの海旭観をがらりと覆された気がした。

ドイツの仏教学の泰斗であるニヤナチロカ博士が、海旭の信奉者であるドイツ人女性を紹介するくだりである。

「エルゼさんは法をおさめるまでは三遍でも五遍でも先生のお膝元で修行する覚悟で、海を渡ってきました」と頼み込む博士に、「西光寺に女の人を置かないことは、博士もよくご承知のはずです」と海旭。

「それでは先生の仏法は、女人には済度せん掟ですか」と食い下がる博士へ、「困ったな、そ、そ、それはつまり、私の嗜好の問題です。まったく参ったな」と困惑いっぽうの海旭。

ドラマ仕立てとはいえ、この海旭の狼狽ぶりに、今井は、女性に臆する少年の稚気を感じて、海旭がなにやら愛しくなった。今井の

中で海旭のイメージが身近なものへと変わったのである。

——海旭先生にくらべて、私の父ときたら——

今井は、ずいぶん後になって親戚から聞かされた父と母の結婚の経緯が浮かんできて、つい思い出し笑いをしていた。

今井の父は、三十をすぎて広尾の名利・祥雲寺の境内にある禪寺・香林院の新住職に迎えられることになった。それを機に縁談がまとまったのだが、結婚式をすっぱかして雲隠れしてしまった。なんと品川の女郎屋にしかこんでいたのである。それを親戚が見つけて連れ戻し、母と母方の親戚をなんとか説得して結婚を成立させた。そして長子として生まれたのが今井正だった。

——なまぐさ坊主の親にしてこの子ありか。

海旭先生とは大違いだ。

と今井は自嘲の笑いをもらした。

しかし、待てよ、と今井は思いなおした。

母は芝白金の北里伝染病研究所の前身である

痘苗所に勤める職業婦人のはしりだった。父はそんな素のままの女性である母に臆したのではないか。そこで「玄人女」のところへ逃げ込んだ。父もまた女が苦手だったのかも知れない。思えば、今井の知る限り、あれから父が悪場所へ通うことはなかった。つい最近亡くなった母親の下の面倒を最後までみて、母は父さんは本当にいい人だと感謝して息を引き取った。

女性にはシャイでナイーブであり続けた父は、どこか海旭に似ているのかもしれない。そう思うと、芝中時代には偉い人のようだが遠い存在だった海旭が、急に身近に感じられた。思えば今井と父親との距離もそうであった。芝中時代は、海旭と同じように遠くて偉そうな存在で、それゆえ反撥心をためこんで、つのらせていくばかりだった。

(つづく)

★前進座特別公演

法然上人八〇〇回忌 記念
親鸞聖人七五〇回忌

田島榮二作 橋本英治二演出

法然と親鸞

題字 朱海慶

法然 中村梅之助

後援 浄土宗
浄土真宗本願寺派

真宗大谷派
真宗高田派
真宗佛光寺派
（財）仏教伝道協会
（財）全日本仏教会
推薦・読売新聞東京本社
共催

念仏の声
弥陀の本願
いま道を照らす

親鸞 嵐 圭史



恵信尼 今村 文美

青山劇場（渋谷） 11月15日（日）～ 12月15日（火）

11月																12月															
日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日
曜	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
星	1時	1時	1時	1時	貸切	12時	12時	1時	1時	1時	1時	1時	12時	12時	1時	休館日	1時	1時	12時	1時	1時	1時	1時	12時	12時	1時	12時	12時	1時	1時	売切
夜						4時	4時						4時	4時					4時						4時	4時		4時	4時		

《御寺院特別割引》 A席 8,800 円 / B席 4,500 円

（定価料金 A席 11,000 円 / B席 5,000 円 / C席 3,000 円）

《お問合せ》前進座東京営業所 ☎ 0422-49-2811 FAX 0422-45-0312

URL <http://zenshinza.com/> E-mail tokyo@zenshinza.com

第三十回

江戸を歩く

森清鑑

大江戸ウォーカー

谷中

螢沢を藍染川に沿って南に歩く。周囲は下駒込村の田畑。谷中三崎町通に出る。さらに下ると左は川に沿って細長く法住寺（浄土宗）。右手は小倉藩小笠原右京大夫の抱え屋敷（一万坪以上、現千駄木二丁目）。藍染川の水が邸内の池に流れ込んでいる。屋敷の南端で川は二手に分かれ、右にそっていくと左手、広大な根津権現社。川の水は社地の中まで巡っており、敷地は別当、神主屋敷まで含めると現在の三倍はある。

根津権現社

根津権現社の創建は、宝永三年（一七〇六）。祭神は須佐之男命、大国主命、菅原道真公など。五代將軍綱吉が壮麗な権現造の社殿、本殿、拜殿を造営（重要文化財）。これは文字通り天下普請であった。五百石を社領寄進し、



◆江戸名所図会 根津権現社の眺望。

歴代將軍の氏神である山王神社や江戸の守護神、神田明神並の社格にした。根津の地名はこの神社から始まる。地名の由来には諸説ある。日本武尊が「国の津たりといった」、「向丘の根にあたり舟の止まるところ」など。神社そのものの歴史は古く、千九百年前に日本武尊が千駄木の地に創祀したと伝えられている。その場所は、団子坂の北側にあり、小規模だが、由緒ある神社として太田道灌も社殿を寄進している（元根津の宮旧地）。そして根津権現社として現在地に遷座する前、この土地は三代家光の三男、綱重の下屋敷であった。この下屋敷で生まれた、綱重の長男が、後の六代將軍家宣である。したがって彼にとって根津権現社は産土神。境内に家宣公産湯の井戸や朧衣塚が残されているのはこのためである。綱吉は家宣を後継者に決めてから根津権現社の創建に着手した。將軍になって後、家宣は江戸全町より山車を出す壮大な天下祭りを推進。この時、大神輿三基を奉納してい

る（現存）。しかし、富士山の噴火など災害が相次ぎ、実際の祭りが行われたときには、家宣はこの世の人ではなかった。家宣が將軍になったのは四十八歳の時。そして五十一歳で惜しまれながら亡くなっている。將軍在籍期間は僅か三年であった。家宣は將軍に就任すると、まず養父綱吉が行った「生類憐れみの令」を即時廃止している。こ



の時、彼はこう明言している。「天下万民のために、あえて遺命（綱吉の）に背くこととする」。これで八千数百人が罪を許された。次いで酒税の廃止。江戸庶民は喝采を送った。柳沢吉保に代え、新井白石、間部詮房まなべあきふさを起用し、文治政治を推進。財政改革も試みている。人事を一新して不正を厳しく取り締まる。彼自身、將軍になる前に賄賂や祝品を全て断っている。心優しき人で「仁慈の心あり」と評されている（徳川実記）。柳沢吉保についても追放ではなく、きちんと遇している。ある幕臣が「庶民は落首、狂歌などで幕政を批判している。厳しく取り締まるべき」と進言すると、「そういう批判の中に重要なことがある」と一蹴。死を意識したとき、「子の鍋松はまだ幼い。古来幼主の時に世が平穩であつたためしがない。東照宮が御三家を立てられたのはこのようなときのためである」として尾張殿を後継とする案を新井白石に相談している。白石はこの案に反対し、結局は鍋松、

後の將軍家継が後継者となるのだが。彼自身、学問を良くしたが、それも半端ではない。白石をして「これほど学問に精進した將軍を私は知らない」と言わしめた。白石の講義を聴くときには下座に拝したという。白石の他に、室鳩巢など多くの学者を招聘するなど人材を積極的に登用。公正であることを重視し、心優しき人であつたが英断の人でもあつた。死因は悪性の風邪といわれているが、その短き治世を惜しむ声は多い。芝増上寺に埋葬された。

根津権現の神主屋敷が南に隣接し、そのまた南は水戸中納言五万四千坪の中屋敷（東大農学部）。根津権現の東側は門前町。さらに藍染川までが清水谷と呼ばれた処。再び藍染川に沿って北へ戻る。川の右側は細長く法住寺（浄土宗）の境内が続いている。すぐに三崎町通に架かる橋がある。直進すれば蛭沢。この道こそが三遊亭円朝の有名な怪談話「牡丹灯笼」の舞台である。法住寺に葬られた、



◆江戸名所図会 「三崎法住寺、妙林寺、蛭沢」下に流れる川が藍染川。中央に法住寺。川の道、右方向が根津権現。

武家の令嬢お露と女中のおヨネが夜な夜な美しい牡丹の提灯をぶら下げて清水谷に住む、生前の恋人、萩原新三郎に会いに来るという咄。カラン、コロンと下駄の音。

団子坂から高林寺

橋を妙林寺沿いに左（西）に曲がる。千駄木町下町を抜けてまっすぐ歩くと団子坂。由来は、団子が転がるほどの急坂。団子のような石がごろごろあったなど諸説ある。潮見坂ともいった。池波正太郎の「剣客商売」にも良く登場する坂である。この坂を登って、そのまま三崎町通をどんどん西へ行くと日光御成道にぶつかる。これを右に曲がって御成道を北に行くと右手が高林寺である。周囲は寺に囲まれている。江戸期、高林寺の敷地は現在の倍はゆうにある。

高林寺は禅宗の寺で慶長元年にお茶の水に創建された。今の順天堂大学辺りという。寺内から湧き出た水がことのほかうまく、二代

将軍秀忠が鷹狩りの際立ち寄り、この水で立てた茶を堪能したことが、現在の地名「お茶の水」の起源となった。ところが寺は明暦の大火で焼失。この地に移転することになる。

幕末、緒方洪庵という人がいた。この人は、二十二歳で深川の蘭学医坪井信道塾に入門。本誌でも紹介した蘭学者川本幸民の弟弟子である。その後、大阪に出て適塾を開く。門下生に橋本左内、大村益次郎、そして福沢諭吉を初め、三千人。福沢は一冊しかないオランダ語の辞書を引くために夜もろくに寝たことがないほど勉強したと後年述べている。適塾の活動は天保九年から文久二年までの二十二年間に及ぶ。幕府の奥医師にと再三請われ、ついに意を決し、再び江戸の地を踏む。若いとき江戸での修行時代に縁があった伊藤玄朴宅に間借りし、玄朴が創設した西洋医学所（東大医学部の前身）の二代目頭取となる。しかし、江戸に出た翌年の文久三年、御徒町の医学所屋敷で突然咯血、五十四歳で急逝す



◆江戸名所図会 ひくらしの里の光景(1) 中央横道が天王寺から来る道。右行くと御殿坂、左、七面坂。右上の高台に本行寺。左、物見塚。

る。幸民は事態を知り駆けつける。そして、この高林寺に葬られたのである。小さくなった現代の高林寺に入ると、門から正面が本堂。その左手を回り込み奥に巨大な自然石の墓所がある。森鷗外の追悼碑もあり、彼がいかにか門下生から慕われていたかが判る。高林寺の東側に隣接しているのが浄土宗蓮光寺。ここには蝦夷、国後、択捉を探検した最上徳内（二七五四―一八三六）の墓がある。彼は貧農の生まれだが、独学で学問を積み、本多利明の音羽塾で医学、国学、天文学、地理学、航海学を修め、三十一歳から蝦夷北方を探検し続け、アイヌとの親交、研究、果てはロシア語にも堪能になる。ついには同地の専門家として幕府に取り立てられ武士になった。

日暮里

団子坂を下って再び藍染川にでる。清流である。橋沿いの道をこの川に沿って左（北）に行けば蜷沢。宗林寺を右に見て新堀村、下

駒込村から田端村へと西へ進む。左に曲がらずにそのまま藍染川の橋を渡って三崎町通を行く。右手に法住寺の木々、本堂の屋根が見える。再び左（北）に曲がる道がある。これを行けば三崎坂^{さんさきざか}を登り、宗林寺東側を通り、新堀村、道灌山方面に出る。三崎町通をさらに行くと右手に瑞林寺。ここには大岡越前忠相が眠っている。瑞林寺を過ぎると再び左（北）に入る道。これが天王寺西側に沿って北に登り、日暮の里の高台を抜けて道灌山に行く道である。

天王寺から道灌山までの北一帯が日暮里^{ひぐらしり}。上野の山から続く台地が道灌山へと続く。高台の西側は傾斜して下り、東側は全面崖。見晴らしの良いことこの上ない。この台地の周囲は新堀村の田園。台地の高みを通る道は、天王寺から来る道で左右に寺が並ぶ。高台から西を望むと富士が聳えている。江戸でも有数の富士の名所（現在でも富士が見える唯一の富士見坂がある）。目を北東に転じると遠



◆ひぐらしの里の光景(2) 右上経王寺。その下、延命院。脇を過って下る坂が七面坂。その下に宗林寺。左上養福寺。ほぼ中央左右の道が天王寺から来る道。並行して下に画かれている道が三崎坂から登ってくる道。

く筑波山、日光連山が見える。下方は田畑が広がり、その先に利根川（江戸川）の流れが見える。一帯は桜の名所。箱庭のような豊かな木々と豊富な種類の花々が織りなす美しさ、景観。あまりにも風光明媚なため、江戸の人々は、日が暮れるのを忘れてしまうほど。それでいつしか新堀村を風流に日暮里と当て字し、「ひぐらしのさと」と呼ぶようになった。長谷川雪旦はこの辺りを江戸名所図会で数枚を費やし、詳細に描いている。

天王寺北裏門の前が経王寺。前の道を東に行くと御殿坂を登り本行寺。本行寺の東側は急な崖。「刀祢の帆が寝てもみゆるぞ青田原」。小林一茶の一句。ごろりと横になって青田原ごしに利根川を行き来する白帆を見る。雄大な展望が目につくようである。一茶は住職と無二の俳友であったので度々、本行寺に滞在した。ここはまた江戸でも有数の月見の名所であった。江戸っ子は月見寺と呼んだ。境内の北側の崖沿いにはうずたかい物見塚があ

った。富士講のような、こんもりとした塚である。太田道灌が江戸城築城の際、見晴らしの良いここに物見を置いた跡という。「陽炎や道灌どの物見塚」（一茶）。もともとこの寺は道灌の孫が江戸城内に創建し、宝暦の頃、道灌丘に移転したものである。経王寺の道を挟んだ西側斜面に延命院がある。今度は天王寺北側沿いの道を御殿坂から西に下る。急に下る七面坂。その右側が延命院。桜の名所。坂を下りきると三崎坂から北に行く道にぶつかる（現代の道は延命院を割って谷中銀座へ）。左は長明寺、その向かいには宗林寺、蜜沢である。延命院。江戸期のあるとき、イケメンの僧侶が多数の御殿女中を誘い込み、逢瀬を楽しむという大事件が勃発。舞台にふさわしい景観のある寺であった。天王寺から高台を北に行く道、経王寺、本行寺の北に隣接しているのが養福寺。



◆広重絵 日暮里諏訪の台から筑波山を眺望。

江戸の頃は遊興の地として賑わい、文人墨客の参詣がさかん。境内に自ら名乗った「自堕落先生」の碑がある。元禄期に生まれたこの先生、本名は山崎三左衛門。俳人。仕官、官仕えをしていたが組織に追従するを嫌い三十八歳で辞職、以後、「肉を喰らい、酒に酔うては寝るの日々」を送る。反骨精神を貫き、ある日、自分でこの墓碑を建て、友人を集め、読経の中、突如棺桶から飛び出し、それから呑めや、歌えやの生前葬を催す。これが江戸の人々の評判に。大崎人。しかし、その底には、深い、凄まじい反逆精神が宿っていた。碑文「官仕えを辞め、錢尽きて富貴となり、酒呑んで浮世の覚醒たり」。

養福寺の北隣が浄光寺である。この寺はその北に隣接する諏方明神の別当である。江戸の人々にとっては雪見寺。吉宗が鷹狩りの際、同寺に立ち寄ってから歴代將軍の御膳所となる。腰掛石があり、「眼下に田園遙かに開け、荒川に行き交う白帆連なり、筑波、黒髪（日

光連山）の山々を遠く画き出せることし」。門入って左に東都六地藏。台石を加えて高さ三メートル。優美で凜とした空夢上人の傑作。江戸の人々は道すがらこのお地藏さんを拝んだ。

その隣が諏方明神である。鎌倉時代からある村の鎮守。諏訪の台に鎮座。広重はここから筑波、日光連山を望む景色を画いている。東方一帯に広がった低地を見下ろす人々、桜の名所。二本の太木。崖下には新堀村の茅葺き屋根。春には大勢の人々が参集し、花見を楽しみ座興に興じた。道灌の砦はこの辺にもあったと思われる。

浄光寺・諏方明神の西側は、北に向かって妙隆寺（今はない）、修性院、青雲寺と続く。浄光寺の門を出て左にちよつと行つて妙隆寺沿いに西に下る坂が富士見坂で現代でも富士が見える。青雲寺は「台地の裾の花見寺」と称され、四季折々の花が咲き乱れ、この禅寺が日暮の里の中心と江戸っ子は見ていた。こ

◆江戸名所図会 ひぐらしの里の光景(3) 右上、浄光寺。左上、諏方明神。その上に筑波山。上の道は諏方明神を巻いて右へ。あちらこちらに茶屋がある。



こには滝沢馬琴の筆塚もある。

青雲寺を東西挟む道は、ちよつと下つてから再び上がり、出羽久保田藩二十万五千八百石、佐竹右京太夫の抱え屋敷(二万坪以上、現開成学園)を取り巻いて登る。この屋敷の北東に面して連なる山が道灌山である。諏方明神から青雲寺東を行き、この屋敷の東側に沿って登ると道灌山。道灌山の由来は、この地に出城を築いた太田道灌にちなむものというのが従来の定説(江戸名所図会)。しかし、土地の豪族、関道閑の館がここにあったことから処の人々が呼ぶようになったとの説もある(武蔵風土記)。ともかく、江戸時代は景勝の地。葉草取りや虫聴きで知られる。雪旦は秋の風情を楽しむ人々の姿を画いている。京都の愛宕山よろしく、この高台から、かわらけを投げる遊びが流行った。道灌山や諏訪台は古代の遺跡の宝庫で今なお時折、遺跡が発掘されている(昭和二十八年開成学園グラウンド工事で土器発掘)。貝塚も発見されてお

り(延命院)、江戸時代には下方遙かに展開する田園(荒川区域)が縄文時代には海面下であったことを物語っている。古代の人々はこの台地の果てから海を眺めていたことになる。

【参考文献】

- 「江戸明治東京重ね地図」 中川恵司編
- 「江戸名所図会」 角川書店
- 「江戸史跡事典」 新人物往来社
- 「江戸古寺七十」 小山和著

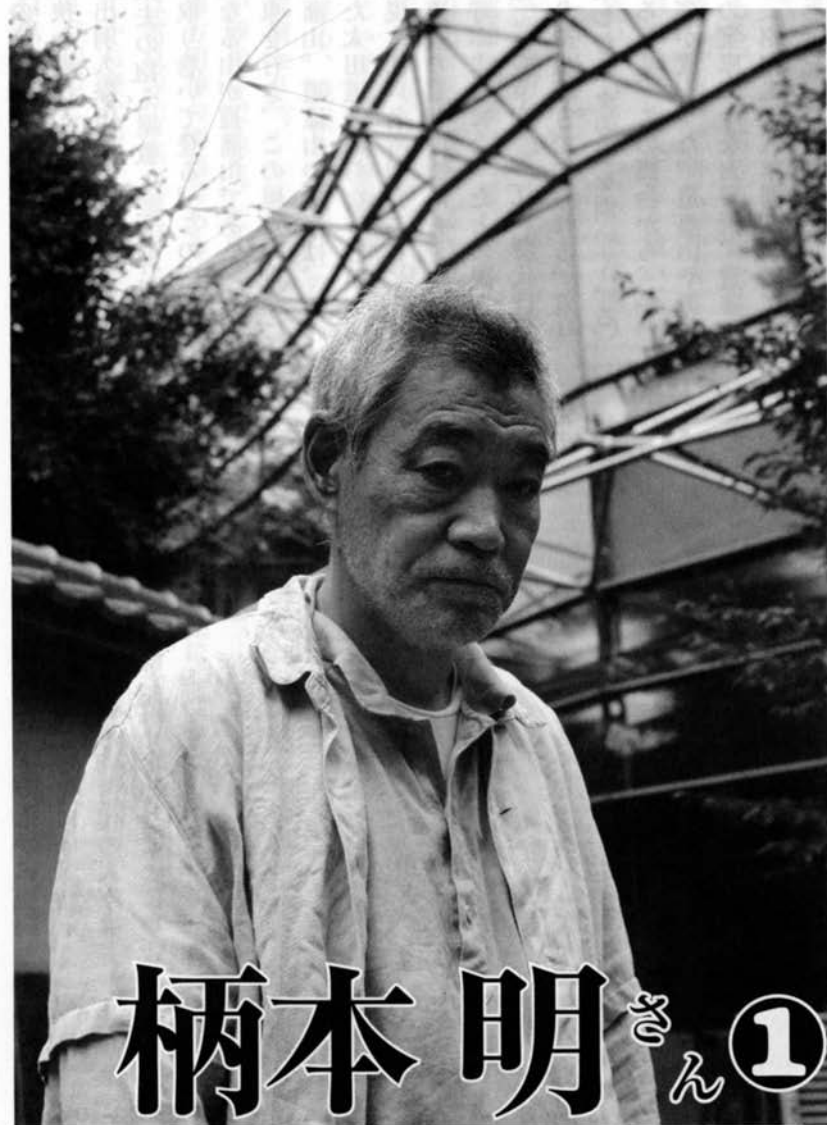
◆江戸名所図会 道灌山聴虫の図。



◆江戸名所図会 ひぐらしの里の光景(4) 右上に日光山が見える。上左の隅が道灌山。

連 載

会いたい 関 容子 人



柄本 明^{さん} ①

撮影／タカオカ邦彦

今年六月、新宿花園神社境内のテント小屋で初めて唐十郎による唐組芝居『黒手帳に頬紅を』というのを観た。なかなかチケットが取れないと聞いていたので敬遠していたが、朝倉摂さんのお誘いがあつて喜んで出かけた。すると、夕暮れの境内の木陰で朝倉さんと、柄本明さん（自転車でいらしたらしい）とが立ち話をしていて、いい風景だった。

柄本さんには勘三郎さんの『浅草パラダイス』などの楽屋で何度かお目にかかっているが、私を見憶えておいではなるまいと思ひ、朝倉さんのお話のすむのをそばで待っていたら、柄本さんが笑つて挨拶をしてくださった。そこで今回のインタビュとなる。

「ぼくは昭和二十三年生まれですけど、ぼくらの年齢だと、オーソドックスな文学座、俳優座、民藝といったいわゆる新劇よりもアンダーグラウンドに、より親しみを感ずる世代でしょうね。一番よく観たのが唐さんの状況劇場、寺山修司さんの天井桟敷、それから早

稲田小劇場、そしてのちにはぼくも所属した自由劇場……。こういう既成のものにはない芝居に触発されて、どんどん演劇の世界に引きこまれていったんだと思います。最初にガーンとなつた唐さんの芝居体験は、『どん底』における民俗学的衝撃』というのを早稲小で観て、これはゴリキーの『どん底』を材料にしてるわけですが、おかしくておかしくて、ちよつとくだらないな（笑）、と思ひながらも面白くて、次々に『少女仮面』とか『劇的な……』とかの三部作を観ました。鈴木忠志さんの演出です。みんな初演ですよ。ですから『少女仮面』で、民藝を辞めてこの芝居に出た初々しい吉行和子さんも観てますし、カスガノヤチヨ役の白石加代子さんのものすごい演技にも圧倒されてますしね」

そう言えば、『必ず試験に出る柄本明』という三十年近く前に出た本の中で、柄本さんがこんなことを言っていた。

「……学生の時、割とつまんないつまんない



昭和57年、下北沢・本多劇場の柿落としての「秘密の花園」に出演する柄本明さん。

できていて……それで早稲小なんて見ると、アナーキーな感じがするでしょ。俺なんかサラーマンしてて観に行つたんだから。ネクタイして観に行つた時に、ずっと行列してる奴の格好が皆だらしなくい、髪の毛の長くい、無精ヒゲの奴等でしょ。それで年齢はもしかしたら奴等より俺は若いくらいなんだよね。そういうのを見ると、憧れるんだよね。

それで汚い二階なんかで芝居やって、映画スターの中村錦之助をバツと見ても、ああいいな、とは思っても、自分がそうならうとは思わない。あまりにも遠すぎて。ところがそういう演劇って、自分にも手が届くような気がして、ここではもしかして自分も何か言ってもいいのかな、と思うじゃない」

なるほど、とてもよくわかる気がする。

私にとつても、先夜の唐さん芝居初体験はいろいろと面白かった。たとえば「デカダン」（顔魔派）というせりふで、「でかい団子」が小道具で出てきたりするところ。こうした言

葉遊びのようなものは、その後の野田秀樹やいろいろな人たちの芝居にもかなり影響しているようだ。

「唐さんは昭和四十年代からああいうふうな
ことやってたんですから、先駆者ですよ。唐
さんの頭の中ってどうなってるのかわかんない
ですけど、ときどきある種の言葉がこっち
に突き刺さってくることがあるんですよ。」

〇〇〇、〇〇〇〇というような言葉が随所にあつて、それが詩になつて突き刺さつてくる。と、泣けちゃうんですよ。出てくる人物とか、彼らが何を言いたいのかは別によくわかんなくても、不意に泣けてくる。唐さんはある種の天才でしょうね。台本は、蟻ん子みたいな小ちやい字で、コチャコチャ書いてつて、書き直しというものが絶対ない。上演のときに直すことはあつたとしても、台本を書くときは迷わずにいつ氣に書いてちやう。それも天才の証拠でしょう」

この小さな字というのは、唐十郎の貧乏時

代のなごりで、カレンダーの裏などに横書きでビッシリ書く癖がついた、という話を何かで読んだことがあった。

柄本さんは唐十郎作の芝居に三本くらい出演している。

「本多劇場の柿落し（昭和五十七年）で……下北沢はぼくの地元ですからね、『秘密の花園』というのに緑魔子さんと出ています。あと二本くらい出てますかね。観るのは面白いんですけど、演るのは結構しんどいで、あんまり出ていません」

しんどいと言えば、花園神社の『黒手帳に頬紅を』でも、ステージ後方が開いて夜の闇の中から客席の大歓声で迎えられた唐十郎が、幕切れ近くには舞台中央に置かれた大きなガラスの水槽の中に頭から飛び込んで見せたりした。唐十郎六十九歳。

「唐さんの『二都物語』という芝居。このときは上野不忍池のひとりだったので、ステー

ジの後方があくとそこが池で、役者が泳いでくるんですよ。これはワァーツという感じになりますからね。まあある種のカタルシス（浄化）ですよ。しかしそれがものすごく素晴らしいということにはすぐ結びつかない。その方法論の使い方が面白かっただけで、問題は作品ですよ。そんなこといくらやっても作品の中身がよくなかったら仕方がない。『二都物語』はたまたまい作品でしたけど」

唐十郎は昭和四十七年、韓国の抵抗詩人である当時保釈中の金芝河との合同公演を計画し、戒厳令下の韓国に渡って取材。『二都物語』を書いた。

「方法論で思い出しましたが、歌舞伎の『蘭平物狂』らんぺいものくるいというのも、最後の立廻りはものすごく派手にやるんだけど、その前の話が全然よくわからないでつまらないから、最後の立廻りがあんまり興奮できないんですね。芝居ってむずかしいですね」

柄本さんは東京銀座の聖路加病院で生まれたというから、生粋の東京っ子だ。

「でもね、柄本ちゃん出身どこ？ 青森？なんて言われる（笑）。別にいいんだけど、どうもぼくは東北のイメージなんですわね。親父は泰明小学校で、同級生に殿山泰司さんがいました。あの方もおでんの名店お多幸の若旦那ですからね。でも奄美大島出身？ っていう感じもありますよ（笑）。おでんやさんはお父さんの後妻さんの子が継いで、殿山さんは道楽者になって、役者になったんだそうです。『三文役者アナーキー伝』というのをぼくはラジオで読んだことがありますけど、殿山さんが書いてる『絵の好きなハンコ屋のせがれ』というのがうちの親父のことでした。親父は印刷関係の仕事ですけど、嫁に來たばくの母親は中野生まれで歌舞伎好きで、相手は歌舞伎座のある木挽町（こびきまち）でしょ。嬉しくてしょうがなかったと思うんだけど、親父が商売失敗してぼくが五つ六つのころに杉

並の下井草に移りました。でも、今は新橋演舞場のそばの今は高速道路になってるところが昔は川で、ボートで遊んでますし、三原橋の映画館にも憶えがあります」

柄本さんの母上の御最良役者は十四代目守田勘弥。玉三郎の養父にあたる、すつきりした容姿の二枚目だった。

「おふくろは、今、歌舞伎の中に勘弥がいない、って言ってます。十五代目羽左衛門という伝説のない男が戦時中までいて、勘弥は小型羽左衛門と言われたそうですけど、そういういかにも歌舞伎の二枚目然とした役者が今いなくなった、ということなんでしょう」

御両親の共通の話題は、映画。二人の話に耳を傾けてさえいれば、明少年は自然とオールドムービー通になれた。

「とにかく、クーパー、デートリッヒ、ルイ・ジュベ、ギャグニー、バーグマンと、そんな話ばかりでしたからね。ぼくはと言えば、日曜になると百円玉一つ持って、電車



昭和58年、東京乾電池第21回公演「リルの着く駅」での柄本明さん（新宿紀伊国屋）。

賃が往復で十円。めざすのは野方映画、西武座などで、三本立てが五十円。コッペパンが十円で、マーマレードとバターピーナツをつけてもらうとあと五円。それで朝十時ごろから並んで入場したら一日中、三本のところを五本くらい観て帰るわけだけど、飽きなかった

ですね。と言うより、ほかにすることもなかった(笑)

柄本さんはたちまち中村錦之助ファンになった。

「そう、たしか小学一年のとき親父に連れられて観に行つて『笛吹き童子』から狂つたんですよ。もう、錦ちゃん錦ちゃん錦ちゃん、状態でした。小学五年になるまで毎年、錦ちゃんに年賀状出してましたけど、ついに返事は来ませんでしたね。のちに萬屋錦之介つてへんに改名しましたけど、ぼくにとつてのあの人はやっぱり中村錦之助です」

このようにしてユニークな柄本明ができて行く。この柄本家の映画好きの伝統は脈々と続いていて、現在の柄本さんの家族も映画によつて固い絆で結ばれている。追々ここに登場する奥様で女優の角替和枝さん、長女のかのこさん、長男の佑(きょう)さん、次男の時生(ときお)さんも揃つて大の映画好き。

「これは代々の家風ですね。長男は中学二年

のときオーディションを受けて黒木和雄監督の『美しい夏キリシマ』に出演しました。映画の現場はタテ社会ですから、反抗期なんかやつてたんではつとまりませんからね。おかげでその時期もすんなり乗り越えました。下の倅もじきに二十歳ですが、映画の制作のほうに進みたいようですし、兄弟で芝居をしてみたい、みんな好きなことをやっています」

柄本さんにとつて映画館とは、何かから逃れて一人になれる、ほつとできる場所だそう

だ。「暗い中に光が発せられて、ある物語を伝えてくれる。こちらはそれをのぞき見るような、犯罪者みたいな快楽にひたれる。大袈裟に言えば人間の持つ闇の部分の娯楽でしかね。歌舞伎とかいろんな演劇なんかもそれにあたるでしょう。おかしいのは、映画が終つて場内が明るくなると、娘や息子にバツタリ出遭つたりしてね、ああ俺の家族、と思つたりします」

(つづく)

われも人も、ただおくれさきだつ代りめばかりにてこそ候え。そのたえまをおもい候も、またいつまでかと定めなきうえに、たといひさしと申すとも、ゆめまぼろしいくほどかは候べきなれば、ただかまえておなじ仏のくににまいるりあいて、蓮のうえにてこの世のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をもちたり、たがいに未来の化導をもたすけんことこそ、返す返すも詮にて候べき。

(法然上人「正如房へつかはす御文」)

誰も、その身をこの世にとどめおくことはできません。自分も他人も、先にお浄土に往くか、あとから往くか、ただその違いでしかありません。その時間の先後を考えたところでわかるものではないですし、たとえその時間が長いとしても、夢や幻程度のもので、それほどの年月でもありますまい。ですから私もあなたも、阿弥陀さまのお浄土へ往生してそこで再会できるのだ、ということをよく心得ましょう。そして往生したあかつきには、蓮台の上で、娑婆であつた憂いを晴らし、思い出話でもし、共に娑婆世界に戻って、人々に往生浄土のみ教えを教えて差し上げようとするのが、何よりも大切なのです。

三次元の家系図

家系図づくりが今、注目を集めているという（八月二十五日産経新聞朝刊）。古風なものが流行るものと、いささか不可思議な思いを抱きつつ記事を読み進めていくと、なるほど、そういうことかと合点がいった。

埼玉県所沢市の行政書士氏は、この一年間で約百件の依頼を受けて家系図を作成、現在も十数件が順番待ちの状態だという。費用は五万二千五百円から三十六万七千五百円。これを安いと見るか高いと見るかは、意見の分かれるところであろう。数十万円の幅があるのは、必要となる調査の度合いによるものらしい。第一線を退いた団塊の世代が、先祖のルーツ探究に力を入れているものと思いきや、なんと、「発注主」は四十代を中心に、次いで三十代という、意外な現実。

「先祖の名前やお墓の場所が知りたいという人が多い。家族がバラバラになり、個人主義が進んだことで何か不安定な感じがしていることの表れでしょうか」（同氏）。まさに現代における家族の実情を反映している。

インターネットの検索サイトに「家系図」と打ち込んでみた。出てくる、出てくる！「家系図作ります」の企業PRが多いが、中には家系図作成用の無料ソフトを提供している奇特な方もいらっしやる。

ある会社のホームページには、家系図を依頼した人の感想が載っていた。

「いろいろな名前が並んでいると、ご先祖さまと近くなったような感じだ」

「忘れかけていた大切なものを教わった」

いやはや、そうした感想にこそ、こちらが大事なことを教えられたような気がしてならない。

少子化が進めば、必然、おじ、おば、いとこの数も減る。核家族化は、祖父母や曾祖父母との接触の機会を奪い、先祖に関するリアルな話を聞く機会も減らす。個人主義は、複雑な人間関係を避けたがり、仮におじ、おば、いとこが多数いても、付き合いは希薄になっていく。ともすると、同じ屋根の下に暮らしている者だけが「自分のグループ」という錯覚を持つことになる（最近はそのれさえ危ぶまれている）。その錯覚は、実はもつと長い「縦」と、もつと広い「横」の関係性における、自己の位置、足場を見失うことにつながりかねない。行政書士氏の「不安定な感じ」の分析は的中しているようだ。

浄土宗では一昨年来、「法然共生」ほうねんともいきをメッセージシンボルに掲げ、「ともいき」の大切さを訴えてきている。「共生」は一般に「きょうせい」だが、これだともつばら、環境問題を含めた生物学的範疇における共存を意味する。浄土宗が伝えようとしているのは、それを含め、さらに「縦」のつながりの大切さを強調している点に、その意義と特徴がある。

私たちが生きているのは、「現在」の「横のつながり」だけによるものではない。悠久の「過去」から連綿と受け継がれてきた「いのち」の結果として、今、こうしてあるのであり、さらにまたその「現在」は、「未来」への土台として「いのち」をつないでいく役を担っている。先立つた方々との絆が途切れることもない。「縦」のつながりである。「横」と「縦」とが交差する点、すなわちそれが、「私」であり、「私」の寄る辺である。こうした視点で自己を見直す時、何か、大きな作用のなかで「生かされている」と感じないわけにはいかない。「私のいのち」は「私だけのいのち」ではないことに行き当たる。

家系図の流行傾向は、そうしたことへの気づきの顕れと受け止めたい。とすれば、こんな結構なことはない。

本誌が読者のもとへ届く頃には、秋の彼岸も過ぎていよう。その期間中、どれだけの人が家族を伴ってお墓を訪れただろう。子ども連れでガヤガヤと墓参している微笑ましい光景が、最近は減っているように感じる。

家系図もよい。が、墓参をすれば、石に刻まれた名前をもとに先祖の話題に花を咲かせることができる。極楽の蓮の台で談笑する姿がまぶたに浮かぶ。懐かしい思い出もよみがえる。今生きている者への語りかけも聞こえてこよう。かけがえのない、三次元家系図の世界が現出する。

(小村正孝)

昨今日にする言葉に「プロバイオティクス」というのがあります。「生きて腸に届き、腸内菌叢のバランスを改善する微生物」という意味で、がんのリスクの低減・アレルギー症状の改善・免疫力の向上などに関わりとされ、この微生物を含む食品を「プロバイオティクス食品」といい、食品の新しい機能性としてニュートタイプのヨーグルトなどの「売り」によく使われています。

この微生物とは乳酸菌ですが、なに、プロバイオティクスはヨーグルトなど動物性発酵食品の専売特許ではなく、植物の発酵食品にもあって、二〇〇六年にカゴメが発売した乳酸菌製品に使われている「ラブレ菌」。これは何と京都の漬物の代表の一つである「すぐき漬け」から発見されたものであり、しかも乳酸菌が生きて腸に届くことについては、概して植物性のほうが動物性よりも生き抜く力が強く、とくに漬物は塩や酸（発酵が進むと酸っぱくなる）の防腐作用を利用した保存食品として生まれたものなので、その乳酸菌は塩に

も酸にも耐性があるのだそうです。

つまり、プロバイオティクスとは新しい概念ですが、もともと漬物に備わっていた、という話です。

漬物とは何か。発酵学の大家・小泉武夫教授は、〈野菜、果実、キノコ、海藻類、魚介類、肉類などの材料を塩、醤油、味噌、麹、米糠、酒粕、もろみ、カラシ、みりんなどの漬け床に漬け込み、風味を付加させるとともに、熟成させたり、保存性を保たせたもの〉（『漬物大全』）

と定義しています。しかしややこしいので、ここでは私たちが日常「漬物」と呼んでいる野菜・根菜系に限りますが、漬物は本来保存食であり、材料と塩さえあればできたので、干物と同じくきわめて原初的な加工食品だといわれています。

それがその後、味噌や醤油、酒などができ、漬け床が多様化して、いろいろな漬物が生まれてきたわけですが、日本人にとつての漬物のレーゾンデートル（存在理由）を挙げれば、

一、主食である「めし」を食べるための基本のおかずである。

二、そのための保存食であり、かつ調理いらずで食べられる便利なものである。

三、季節季節の野菜・根菜類を食べられる。

四、腸内で働く微生物が生きている（すべての漬物ではないけれど）。

五、食物繊維が豊富。

六、ビタミンの宝庫。

——ということになるでしょうか。

食材を保存する知としての漬物は、世界中にあります。漬物研究家の小川敏男さんは、漬物の東西代表を挙げれば、東は中国・四川の「榨菜」、西は酸っぱいキャベツ「ザワークラウト」だとおっしゃっています。では日本を代表する漬物といえは……「たくあん」だそうです。

その理由の一つは、世界に漬物あまたあり、かつ米食い民族あまたある中で、米ぬかで漬物をつくるところは一つもないこと。もう一つは、大根

が「古事記」や「日本書紀」にも出てくる日本人にとって古から今日までなじみの深い野菜だったことです。

たくあんの登場は諸説あるけれども、おおむね米を精米して食べ出した江戸時代。そこで出た米ぬかを漬け床に利用したというのが、このぬか漬の乳酸菌にも、前述のプロバイオティクスは強く生きています。

ただし……と言わなければならぬのが悲しいのは、それは昔ながらにきちんと漬けられたものに限り、ということ。いまのスーパで売られているものにはほとんど希望がないといわれます。

いま、一番売れている漬物はキムチだといわれています。そのことに少し残念な思いもするのですが、実はいまの漬物の中で乳酸菌が一番生きているのもキムチだそうです。日本人は一度、漬物という食品に関しての底チカラを考え直さなければいけない、とあらためて思っています。

浄土誌上句会

●夕

〔特選〕夕焼け雲赤城は裾野より暮るる 中島富士子

上毛三山の最高峰である。関東平野の北西を占めるこの辺りは、山が込んでいて、この山の西方には榛名山もあるから、「裾野より暮るる」ということになるのだが、そういう理屈でなく、表現を楽しめばよい。

〔佳作〕夕刊の四コマ漫画夏の風邪

上野 仁

もの言わぬことの涼しき夕べ哉

小林 苑を

夏夕べ犬乗せて行くつば車

山口 信子

●羽

〔特選〕父の日の檻の禿鷹羽ばたかず 上野 仁

父の日を家族で動物園に行く。檻に高くコンドルが居る。野に居れば大きな羽を広げてゆったり舞うところだが、今はもうじつとし

ているだけである。その姿に自分の境遇を当てはめていると見るのもよからう。

〈佳作〉

羽生えてくる風の夜のフラダンス

篠 浩美

夏の雨閑羽を祀る中華街

遠藤 亜美

羽たたむ蝶に静かな寺の庭

石原 新

●自由題

〈特選〉
湖は果てまで見えす雲の峰

西井 正

「果てまで見えす」といえば、琵琶湖や霞ヶ浦を思い浮かべる。ともかく海のような大きさを思えばよいだろう。その湖を裾えて、入道雲がもくもくとそびえ立つ。まさに夏真っ盛りという様相を示しているのである。

〈佳作〉

浅草や賽銭箱に夏帽子

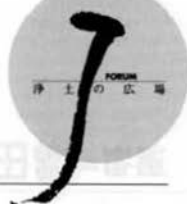
宮崎 棹

鳴外郎雲間の月を仰ぎ見ぬ

増田 信子

昼寝する孫の産毛に玉の汗

山田 至



浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季語ではありません

退堂自由題

真壁保育園 園児の句集より

3 歳児

さくらんぼわたしとおにいみたいだな
杵島花恋
かたつむりふゆはどこにいるのかな
風野絢音
おいもほりつちのなからこんには
廣瀬凌太
きょうりゅうさんどこにいったのあいたいな
井上ひろこ
おほしさまひとつしかないさみしそう
西岡朋慈
そらのくもわたあめみたいいたべたいな
宮川真広

4 歳児

あおいそらくもにのれたらたのしいな
稲葉渉太
あめふりはみずたまりできてたのしいよ
清水友翔

締切・二〇〇九年十月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

5 歳児

ねえみててちゃんとのれたよいちりんしゃ
坂入慎基
さむいあさぼくのおくちはきしゃぼつぼ
大関優斗
うさぎさんがあかいのはないたから
山中寧々
うんどうかいてんこでじいじみてるかな
築井海翔
だるまさんめをかくまではこわいかお
大久保七海
お月さまはんぶんどこかへいっちゃった
須藤 全
かたたきひやくまでたたくよおばあちゃん
大山莉聖
えんぴつでかいたよかわいくままのかお
鈴木祐真

せみのこえみんなないてあついなつ
若松星那
すずめさんちゅんちゅんないてたのしそう
鈴木耶麻斗
ねずみがねちゅーちゅーないてうたつてる
渡辺絳音
ありのへやきょうもみんなでおべんきよう
沼口彩音
とんぼがねおおぞらとんでうれしそう
飯山真喜人
おしゃかさまあまちゃをかけてにこにこだ
泉 京介
うしどしだぎゅうにゅういっぱいのんじやうぞ
小林力也
うまにのりはやくきてねこせんぞさま
酒寄零未

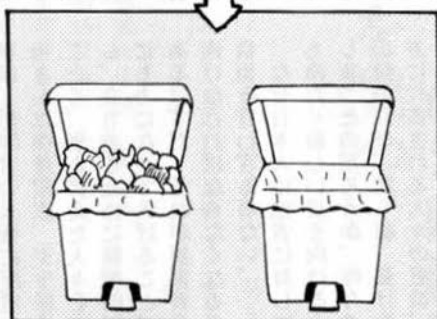
さっちゃんね

64 かい目

かまちょよろう



かまちょよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



秋風が一人廊下を駆けてゆく 岱潤

最近の警察官や、保護司さんたちの研修会で、犯罪被害者に対する救済のためというテーマが目立ってきた。

いわゆる、加害者、犯罪者の人権は言われているのに、なぜ被害者側、被害にあった人が苦しんだままでいなければならぬのかといった問題だ。こうしたことは以前それほど大きな問題にはならなかったのに、ここまで言われるようになったのは、やはり世間の目の冷たさがあるような気がする。昔の日本人はもっとおおらかで優しくなかったのだろう。

しかし、元来警察官や保護司さんの仕

事は、犯罪者の人権に配慮し、特に保護司さんは保護観察、更生保護といわれるごとく、刑を終えた人々を守り、手助けし、立ち直るために精神的にも、制度的にも力になってあげることがその役目であるはずだ。それが被害者の側にも目を向けなければならなくなるのでは、過重負担と言わざるを得ない。

なぜ日本人は他者に対して、こんなにも冷たく厳しい目を向けるようになってしまったのだろうか。昨今の異常なまでの競争原理、勝ち組、負け組という言い方に代表される人々の意識。目に見えるものでしか判断をしない価値観。早い、便利、快適だけを求めた生活。やはり一

番大事な何かを忘れてしまっていると言える。他者へのやさしさ、思いやり。それは宗教心からしか生まれてこないのかもしれない。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

平成二十一年九月二十日
平成二十一年十月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一
東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三三三五六八六九四七
FAX〇三三三五六八七〇三六
振替〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

静岡・華陽院堀田卓爾上人は、9月21日ご遷化なされました。合掌十念

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

こう げん ぎ ぎ
光 顔 巍 巍

光顔巍巍として
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

福德高き人は、高き山に似て、
神々しく輝きを発つ。

「雨ニモマケズ」は、人に尽くすことは、自分
人からエネルギーを貰うことであり、喜びだと教
えてくれます。

宮沢賢治は、自分の周囲に病氣の子供、疲れた
母、死にそうなる人、ケンカや訴訟で争う人がいる
ことに気づき、ボランティアをみずからかつてで
て、看病、手伝い、話し相手、調停を務めて、活

動する四つの世界がありました。従って、詩人は
貧しくて、一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を
食べ、とまやで暮らしながらも、澆刺として輝い
ていたのです。

仏教の視点から見ると、この詩は利他行に励む
ことが自分の修行そのものとする菩薩道を述べて
いると言えます。

法然上人鑽仰会の

本

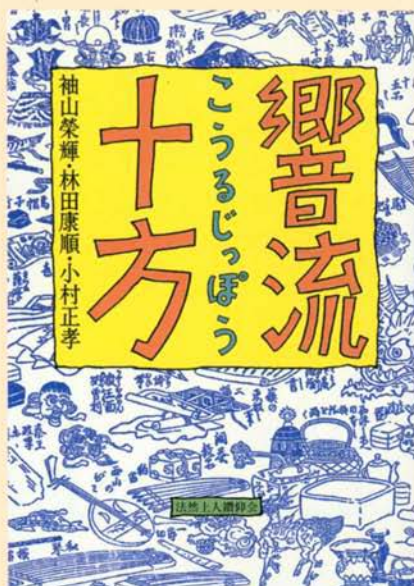
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より